

べるぶ

verve

03

あなたと栄仁会をむすぶ情報誌
July 2009

栄仁会
新理事長・新副理事長 対談

次代を担う
新体制スタート。
未来へのビジョンを
発信する。

特集

RE-NEW 宇治おうばく病院

僕たちの紹介は最後の
ページを見てね!

診療体制を支える4人のリーダー医師
問われる、
医師とコ・メディカルの連携力。

新副院長インタビュー
近畿圏の精神科医療を
リードする、魅力ある病院へ。



医療法人 栄仁会

宇治おうばく病院

べるぶ:仏語のVERVE「活気」より



RE-NEW 宇治おうばく病院

平成21年6月より、医療法人栄仁会 および宇治おうばく病院は、三木新理事長（院長兼任）のもとに、新役員体制が発足。今まで以上に地域医療に貢献するべく、新スタートを切りました。昨年秋季に整備された「メンタルヘルス入院」システムの強化はもちろん、今秋開始予定のスーパー救急体制の整備に伴う、医療エリアの拡大を見据えた今後の取り組みについて、新理事長と副理事長のお二人に語っていただきました。

ダウンサイジングと機能分化に焦点を当てた15年間。

滋岡 この15年は本当に走りつめてでした。平成9年の新田辺診療所開設に始まり、訪問看護ステーションの開設、病院本体の6期・7期病院整備事業と続いて。ちょうど精神科医療が大きく変わる時期だったんですね。病院の方向性を明確にすることが求められる中、宇治おうばく病院はダウンサイジングと機能分化するという方向性を目指したわけですが、これには根幹に三木院長の強い理想と意志がありましたね。

三木 ベッド数を減らすということは単純に病院としての収入を減らすことなので、当初は皆、猛反対でしたね。私は25年程前からずっと、今後は病院のダウンサイジングと機能別棟の整備、それに伴う外来サポートシステムの構築などが、今後の精神科医療の指標であると思っています。私としては、今の412床を最終的には350床くらいまでさらにダウン

ためにスーパー救急は急務でした。
滋岡 今回の新体制下では、京都駅前メンタルクリニックの再整備も大きなポイントになりますね。

三木 京都駅前クリニックは、前から昼間診療も行いたいと思っていましたが、人手不足で開くことができませんでした。今回6月から昼間診療をスタートし、うつ・ストレス疾患のクリニックとしても位置づけを明確にし、復職支援専門「ダイヤ」、メンタルヘルス入院とともにいい流れができることを期待します。

統合失調症圏の就労支援も、取り組むべき大きな課題。

三木 それから、統合失調症圏の就労支援にも力を入れていきたいですね。若い時に統合失調症を発症した人たちがいざばん望むのは、働く場です。急性期の治療は短期間で終わり、デイケアや精神科作業療法室に通っています。しかし、本来は皆働きたいと思っています。

滋岡 働くための援助機能を宇治おうばく病院が持つていけば、それは大きな強みになります。

三木 精神保健福祉士の方の頑張りがあります。重要です。

滋岡 経済情勢は悪いですが、たとえつでも二つでも、地道に開拓していくことが大切です。と同時に今は長期入院で安定している人を、ケアホームやグループホームを活用しながら在宅に戻していくことも必要だと思います。病院の中で食事から入浴、睡眠まであれこれ管理されるよりも、自分一人で自立して暮らす方が幸せです。そういう方向へ向けてあげていきたいと思います。

(笑)



栄仁会 副理事長

滋岡 嘉弘

1944年生まれ。1972年より宇治おうばく病院に勤務。人事課を経て1996年に事務部長、2005年常務理事に就任。今年6月から副理事長に。趣味は読書と料理。休日の食事は、材料の買い出しから調理まですべて担当するそう。



栄仁会 理事長・院長

三木 秀樹

1956年生まれ。1983年金沢大学医学部卒業後、研修医を経て1985年より宇治おうばく病院へ。1997年副院長、兼新田辺診療所所長就任。2005年に第9代院長就任。今年6月より理事長を兼任。趣味は読書。最近のお薦めは天童荒太氏の「悼む人」。

次代を担う新体制スタート。

滋岡 宇治おうばく病院は昭和44年から内科を整備し、身体的疾患も見られる精神科主体の病院ですが、精神科医療への根強い偏見がまだまだあります。日頃の地域の中での活動が不足していたのかなと考えています。今後はもっと地域への発信が不可欠になっていくでしょうね。

三木 地域連携には全力で取り組んでいきたい。地域の医療機関の方々には、今後の宇治おうばく病院の動きに注目していただきたいと思います。

未来へのビジョンを発信する。

三木 そういう意味でも、今秋に導入予定のスーパー救急が起爆剤になればと思います。メンタルヘルス入院も、もっと機能させていけるだろうし。

滋岡 さまざまな取り組みに挑み、実現してきたからこそ、次の展開が考えられるのだと私自身、確信しています。スーパー救急棟の整備も、財務面からしっかりと支えて発展させていきたいと考えています。さらに、私自身の夢でもあるのですが、社会医療法人への転換もぜひ果たしたい。

三木 日本精神科病院協会の雑誌に掲載されていたのですが、現在精神科には年間25万人の入院があるそうです。そのうち急性期、救急病棟に8万人。しかし急性期、救急病棟は1.1万床で、現在ある30万床のうちわずか33%程。極論を言えば、入院のない病院は施設でもいいわけですが。私としては宇治おうばく病院を施設ではなく、病院として残したい。その

新体制になって、スタッフ一人ひとりに望むこと。

三木 今回新体制に移行するにあたり、何をいざばんに考えたかという点、人材をどう新しく組織化するのか、ということですね。若い人材をどんどん登用し、私は皆が働きやすい体制を組むことに専任したい。スタッフ一人ひとりには、自分で問題意識を持ち解決するという姿勢を望みます。また上に立つ者も下の意見をよく聞いてほしい。意見を言っても全然聞いてもらえないのでは、言わなくなってしまうからね。組織風土を変えたいですね。

滋岡 宇治おうばく病院が、今後どんな方向に向かっているのか、病院経営に携わる者にとって、大きな楽しみです。

三木 私の考えは基本的に変わりがなく、精神的に辛い時にいつでもちゃんと対応する病院でありたいということですね。何でも受け入れる、というのではなく、うちでできないことは他の医療機関と連携を取り合いながらね。そのためにも、宇治おうばく病院の得意分野が何か、不足している分野は何か、明らかにしていくことが大切。

自ら考え行動できる人材の育成を目指し、教育体制を整備する。



副院長 看護部長 山口 政美

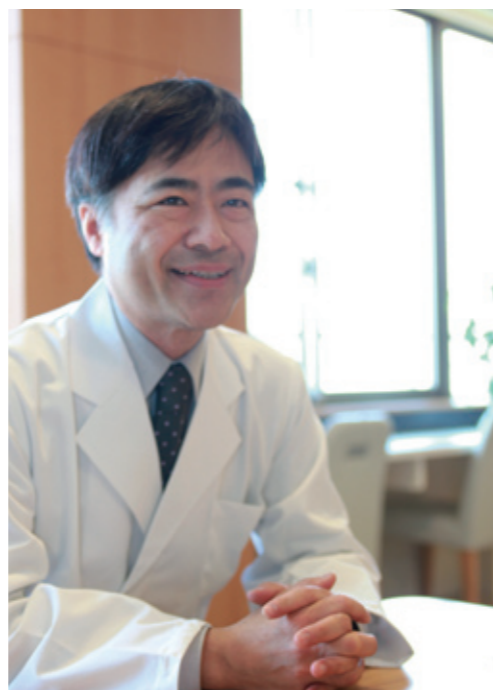
愛媛県出身・やぎ座

1975年、愛媛県の精神科病院勤務。1990年に宇治おうばく病院へ。2007年看護係長、看護課長、看護副部長を経て、看護部長就任。2009年副院長に。趣味は海釣り、将棋。オフの日は、愛犬の相手をしたり、友人と居酒屋通いを楽しんだり。

職員の意識向上で、よりよい医療の提供を。

副院長兼看護部長として、さまざまな外部情勢を的確に捉えながら、これまで以上に病院長を補佐し、病院(法人含む)運営の安定を図りながら全体の管理に努めたい。職員にとっても患者さんにとっても、「おうばく病院に来て良かったな」と言ってもらえる病院にする責任があると考えています。医療については、当院のビジョンである「近畿一のブランド力のある入院治療システムおよびプログラムを確立する」ことで、いい医療は提供できる。同時にスタッフ教育も重要で、私自身が統括する看護部はもちろん、一般職員についても教育委員会を中心に病院のビジョンに見合う教育プログラムを実施し、評価制度の構築も考えていきます。我々の仕事はチャレンジなくて進歩なし。上から言われて動くのではなく、自ら考えて行動できることが大切です。失敗を恐れず、どんどんチャレンジしてほしい。また職員一人ひとりが他の職種についてもっと興味を持ち、チームで医療しているという認識を強めてほしい。私自身も他の副院長との協力がこれまで以上に不可欠となります。コミュニケーションを密に取り合いながら、新職務に全力で取り組みたいと思います。

職員一人ひとりがやりがいを持ち、生き生きと働ける病院に。



副院長 地域支援部長 村井 俊彦

京都府出身・おうし座

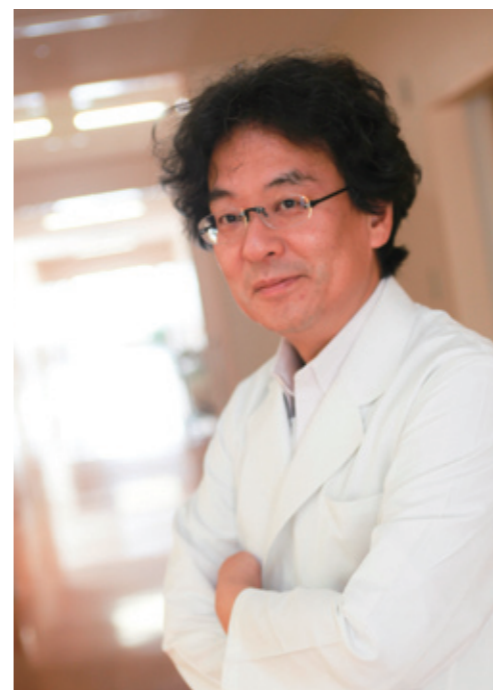
1993年より勤務。当時の副院長の「この病院は利益が出れば3分の1は患者さんへ、3分の1は地域へ、そして残りの3分の1を職員に還元する」という言葉に共鳴し16年経過。趣味は、映画鑑賞と読書。オフの日は昔はスキューバダイビングでしたが今は眠ること。

今まで以上に、地域連携の強化に尽くしたい。

今回、副院長に就任させていただきましたが、私自身の思いはずっと変わらず、宇治おうばく病院を、まず職員各々が治療と看護、ケアに専念でき、また患者さんには「しんどい時は、おうばく」と思っていただけの空間とすることです。私の場合は、兼任する新田辺診療所所長、広報委員長などの経験を活かし、外とのつなぎに重点を置いて取り組み、支えていけたらと考えております。

具体的には、新たに発足した地域連携室(メディカルサポートセンター)の整備と、昨年から導入しているメンタルヘルス入院システムの強化。医師、看護師、精神保健福祉士はもちろん事務の方も、一人ひとりが患者さんのことを知り、さまざまな役割を積極的に引き受けることで、精神科医療に携わっているという「アイデンティティ」を高めてほしい。また今秋開始予定のスーパー救急についても、地域連携室が確実に機能を果たし、現場が疲弊しないよう、最初のトライアージ(治療優先順序の選別)から入院、地域への逆紹介までしっかりサポートしたい。他の副院長と力を合わせて本当の意味での信頼の得られる病院を築き上げていきたいと、心を新たにしています。

目標は、これまで以上に緊密な地域連携システムの構築と稼働。



副院長 岡崎 信也

広島県出身・さそり座

1992年より宇治おうばく病院に勤務。1999年洛和会音羽病院へ。2001年に戻り、医長および烏丸診療所所長を務め、2004年より副院長に。2005年から2年間は新田辺診療所所長を兼務。趣味は旅行、インターネットショッピング。オフの日は、ドライブを楽しむ。

重装備独立型から、地域連携協働型病院へ。

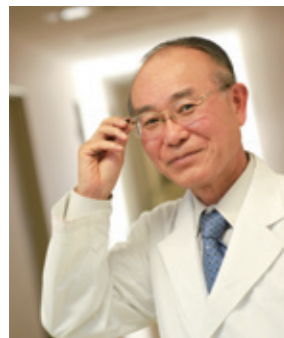
従来通り院長の補佐役として全体の取りまとめを行うとともに、精神科医療を少しでも一般科のレベルに近づけるよう努めたい。精神科の診療体制は一般科と比べてまだまだ改善の余地があります。これまでは、いわゆる重装備独立型病院として自前でデイケアやグループホーム、サテライトの診療所などさまざまなサービスを揃えていましたが、診療圏が拡大しつつある今日において、すでに限界に達しつつあります。だからこそ、今後はこれまで以上により緊密な病院と病院、病院と診療所の連携システムを構築し、しっかりと稼働させたい。また医師をはじめとする必要人員の確保も重要ですし、今秋開始予定のスーパー救急の整備、精神障害者の方の就労支援部門の立ち上げなど、課題は山積です。私自身、診療に携わりながら統括する業務の整理をすすめ、確実に取り組んでいくつもりです。今回、3副院長体制となり、うまく機能を分担できれば、より多くのことを推進していけると考えています。またスーパー救急がスタートすると、医師やスタッフがそれぞれのチカラを発揮する場も確実に増えるので、モチベーションのアップも期待しています。



近畿圏の精神科医療をリードする、魅力ある病院へ。

今回の改編で、病院運営に大きく携わる立場となる副院長は3人となり、それぞれの強みを活かした機動力が期待される。当院を近畿圏の精神科医療をリードする魅力ある病院に育てていくために協働し尽力したい、という熱い意欲に燃える3副院長に、今後の抱負や取り組むべき課題について語っていただきました。

京都駅前メンタルクリニック/カウンセリングルーム



栄仁会前理事長
京都駅前クリニック所長

奥宮 祐正

(高知県出身・ふたご座)

1942年生まれ。1970年から三重県立高茶屋病院にて一般精神科・児童精神科医療、アルコール依存症の治療にあたる。1979年、宇治おうばく病院へ。趣味は山歩き、ヨット。オフの日は近所での散歩やハイキングを楽しんでいます。

6月から、午前・午後診療をプラス。対話を重視した診療で、最適な治療を。

当クリニックでは、うつ・神経症・心身症などを主な対象として診療を行い、自分を取り戻す、生き方を見つめ直すための援助を行っています。今回、今まで以上に多くの方のお話が聞けるようカウンセリングルームを増設。また従来は夜間診療が中心でしたが、6月からは9時～13時に新患を中心としたうつストレス疾患の方の診療、14時～15時に統合失調症の方などの診療も行います。対人恐怖や不安障害などの方には外来森田療法を実施。今後は、同じ症状を持った患者さん同士がアドバイスをし合う集いの会を企画するなど、患者さんの気持ちに寄り添ったサービスを提供していきたいと思っています。

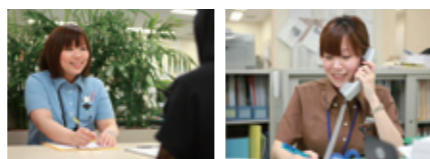


温もりが伝わる、木質のインテリア。ほっと落ちつける空間で、ゆったりとご相談いただけます。

地域連携室<メディカルサポートセンター>

内外をつなぐパイプ役として、業務運営をサポート。

従来、外来地域管理室、外来地域看護室、医療事務室に分かれていた機能がまとめられ、入院後の支援や地域連携診療の紹介、社会資源の提供など他部門のスムーズな業務運営をサポートする部門として機能しています。ひとつの場所に各専門職がいるので、各書類の申請や説明、資源・入院の説明、苦情処理等、相談者のニーズに即座に対応できるためお待たせする時間も解消されたと思います。今後は、利用者のニーズにより迅速に対応できるよう運営していきたい。広報活動を積極的に行い、安心して地域で医療が受けられるような働きかけと、入院体制の整備を心掛けていきたいと考えています。

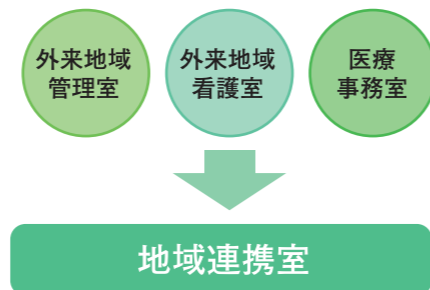


看護係長・
地域連携室室長

百武 智恵子

(長崎県出身・しし座)

1982年より勤務。2003年新田辺診療所、2006年より当院外来へ。趣味は温泉めぐり。オフの日は一週間の主婦業をこなし、娘さんとショッピングや息子さんと野球観戦に邁進するのが楽しみ。



いよいよ 今秋から! スーパー救急 体制始動!!



宇治おうばく病院は、平成21年10月(認可予定)より、24時間対応の精神科救急医療体制がスタートいたします。スーパー救急体制の整備により、当院は京都南部地区における精神科救急医療を担い、地域のニーズに応えるとともに、精神科医療全体のレベルアップに寄与します。

診療体制を支える4人のリーダー医師

問われる、医師とコ・メディカルの連携力。

真に地域に信頼され、地域に必要とされる病院であるために、宇治おうばく病院が今後取り組むべき命題は何か。今まで以上に、医師とコ・メディカルの連携力を発揮していくことが不可欠、と岡診療部長。今回の改編で、各部署をとりまとめるリーダーの任に就いた4人の若き医師たちに、意気込みと抱負をお聞きしました。



地域と連携を図り、患者さんの信頼に、応えられる医療を。

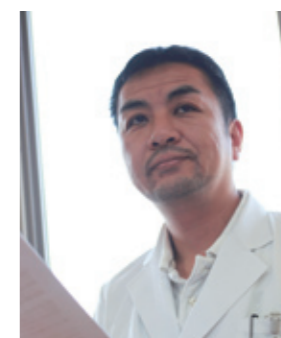
病棟担当医長

竹田 明子

(京都府出身・うお座)

1998年、京都府立医科大学付属病院入局。2005年宇治おうばく病院へ。趣味はバイク。オフは空手修行と予備自衛隊の訓練に。

精神科急性期治療病棟、主にスーパー救急取得後の救急病棟を担当します。通常は、担当外の患者さんを診ることはほとんどないのですが、病棟担当医長という立場ですので、全体の患者さんの動向や病状に気を配り、時にはご家族に対しても、助言させていただこうと思います。私自身に求められることは、患者さんからの信頼に応えられる医療を行い、入院環境を整えること。地域との連携も重要です。入院中はもちろん退院後もサポートできる医療の実現のため、コミュニケーションをより密に取り合いながら取り組みたいと思います。



人の力を活かせる、円滑で魅力ある体制づくりが目標。

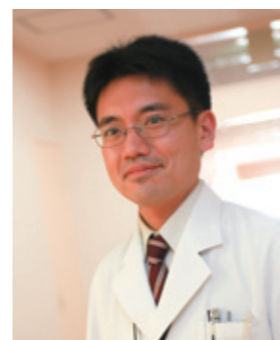
診療部長

岡 正悟

(京都府出身・みずがめ座)

京都府立医科大学附属病院、海辺の杜ホスピタル(高知市)を経て2007年宇治おうばく病院へ。趣味は家庭菜園とサッカー。

医局・薬局・検査部・心理室を統括する立場として、受診相談・初診から通院・入院退院、リハビリテーションまで、各部署間の情報が円滑に流れるシステムづくりをすすめていきたい。他機関への紹介などをスムーズに行うため、こちらができることを地域の先生方にも知っていただけるよう、外に向けての発信も重要です。病院のブランド力は、結局は人の力。個人でも集団でも人の力を活かせる体制づくりを目指します。私自身、心悩める人を受けとめ、理解し、支えるとはどういうことか、常に探求しながら手本となるよう心掛けています。



おうばく病院の強みを、さらに活かせるシステムづくりを!

生活機能回復部担当医長

澤井 真樹

(京都府出身・おとめ座)

1998年、京都府立医科大学卒業。2003年まで当院へ。滋賀県立精神医療センターを経て2008年復帰。趣味は旅行、写真、料理。

リハビリテーションおよび社会的療法は、薬物療法、精神療法と並ぶ精神科における治療の三本柱のひとつです。この分野は、患者さんの病気と生活全体をトータルに見ることが不可避。宇治おうばく病院は以前からこの点を重視し、現在ではケースワーカー、心理士、作業療法士、理学療法士などコ・メディカルの数が関西屈指という大病院に成長しています。医師は治療の方に目がいきがちですが、病院の強みを生かすべく、私自身もなるべく現場に足を運んで医局とのパイプ役となり、まずは風通しの良いシステムをつくるのが目標です。



上層部と現場スタッフとの間の潤滑油的存在に。

外来担当医長

赤澤 祐貴

(京都府出身・みずがめ座)

2001年、京都府立医科大学付属病院入局。2004年より宇治おうばく病院へ。趣味はスポーツ観戦。オフの日は自宅でゆっくり派。

診療に対し広い視野を持つことで、患者さんに質の高いサービスを提供すると共に、新しく発足した地域連携室と協力し、より円滑な診療体制を構築していきます。また各々のスタッフがやりがいを持てる、活気に満ちた外来部門を作りたい。若い医長だからこそ、相談しやすい雰囲気づくりができると思います。現場の状況を反映した意見を汲み上げながら、上層部と現場スタッフとの間の潤滑油的な存在になれればいいですね。今後いろいろな面で勉強が必要ですが、固定観念に捉われず柔軟で斬新な発想を提案していくつもりです。



その人らしさを大切に、
温かいケアサービスを提供する「やまぶきの郷」。

やまぶきの郷は、菟道地域に根ざした地域密着型のサービスを提供する、小規模多機能型居宅介護と認知症対応型共同生活介護、訪問介護と居宅介護支援のための施設です。居宅介護に登録されている場合は、ベッドがあていればいつでも宿泊でき、もちろん緊急時にもご利用いただけます。状況やご希望による訪問や、また通いを中心に利用してもOKと、柔軟なサービスが好評です。また看護師が常勤していること、宇治おうばく病院がバックにあることも大きな安心につながっていると思います。さらに具合が悪い時には、おうばく駅前内科クリニックの医師が駆

けつけます。グループホームは、認知症の方が住み慣れた暮らしに近い家庭的な雰囲気の中で共同生活をしながら、入居者お一人おひとりの能力に応じた支援を行います。患者さんとの関わり合いで大切にしていることは、その人にあった介護サービスを提供するということ。介護度が同じでもそれぞれ一人ひとり症状が違いますので、各職員一人ひとりになるべく多く関わって、個性にあった個別の対応を心掛けています。



やまぶきの郷 主任
大土居 照人
(京都府出身・おうし座)

2002年宇治おうばく病院／認知症デイケアに就職。地域支援部介護事業室を経て、2008年よりやまぶきの郷へ。趣味はラグビー、サッカー、野球などスポーツ観戦。「オフは自宅ゆっくりしています」。



栄仁会のキャラクター、「さかえ3兄弟」です。



長男 仁一郎(38歳) 次男 仁次郎(32歳) 三男 仁三郎(28歳)

はじめまして～。姓はさかえ、名は左から仁一郎、仁次郎、仁三郎と申します。3人集まってもとくに盛り上がりがない、ちょっとびり気まずい3兄弟。これから、栄仁会のさまざまな場所でゆる～く雰囲気や和ませていきますので、お見知りおきを。よろしく願いいたします。

宇治おうばく病院が
NHKの番組で紹介されました。

今年2月放映のNHKスペシャル「うつ病治療～常識が変わる」に続き6月1日の「クローズアップ現代」でも、薬物療法のみには頼らない心理療法・チーム医療を実践する病院として当院が紹介されました!

編集後記

6月1日、三木新理事長を中心に、宇治おうばく病院が提唱する精神科医療を強力に推進する診療体制が、さらにパワーアップしました。若い世代の医師たちが「コンディショナルの専門職たちと組んで、利用者の皆様の目線でチーム医療を実践していこう」と燃えています。彼らのパワーが全開するよう、3副院長体制が支えます。
この新体制ですます「活気」へるぶ・溢れる広報誌を発売していきますので、ご愛読ください。

(広報委員会 荊木 義比古)

“よりそって医療、よりそってケア” 栄仁会スタッフ募集

- 職種** ①看護師 ②准看護師 ③看護補助者(臨時のみ・無資格可)
勤務 ①② 8:30～17:00・16:45～翌8:45(病棟2交替)
③ 8:30～17:00(早出・遅出・夜勤有/週5日)
待遇 ①② 年間休日113日、有給休暇・特別休暇・各社保完備 ③各社保完備
①② 常勤者には、就職支度金として20万円支給!!
応募・問い合わせ 詳細はお気軽にお電話ください。
0774-31-1362 (担当/経営管理室 松本)

院内
保育所
完備!

法人事業所介護スタッフも
同時募集

(表紙モデル) 精神保健福祉士 大塚剛史(兵庫県出身・かに座) 精神保健福祉士 美保 忍(京都府出身・おうし座)

